

後期水戸学におけるナショナリズムの形成

—藤田幽谷と会沢正志斎を中心に—

本論文は後期水戸学の源流とみなされている藤田幽谷 (1774-1826) とその門人である会沢正志斎 (1782-1863) の学問を考察した。後期水戸学は「国体論」が定着してから戦前にかけて、日本に甚大な影響を与えた学問である。「尊王攘夷」の源流として戦前までさまざまな研究者に取り上げられ、戦後に至ってはイデオロギーとして批判される場合が多く、後期水戸学派の思想の系譜を整理する研究は少なかった。本論文は水戸藩の『大日本史』編纂事業および江戸後期のいわゆる「内憂外患」の政治情勢を背景にして、幽谷と正志斎が「儒学者」身分で日本儒学だけでなく、国学や宋学ないし西洋知識も含む日中洋の学問を幅広く受容することを明らかにした。

第一章「藤田幽谷『正名論』の二重性格」では、藤田幽谷がまだ 18 歳のとき松平定信宛てに書いた「正名論」を取り上げ、成立時の歴史・思想的背景を考察した。「正名論」は幕末に攘夷志士に愛読され、戦前の水戸学研究においても「水戸学精神」の源流・中枢とされている。その文中には『論語』の「正名」思想のみならず、司馬光『資治通鑑』の「名分」思想も取り上げ、将軍は天皇を尊敬して「摂政」と称すべきという趣旨が示されている。「実際の権力支配者」である幕府を重要視する「国王復号論」(新井白石)よりも、幽谷は「名」を重んじており、「名分的な君主」である天皇を絶対視して、当時の世論において強い影響力を持つ「国王復号論」に反発した。結論として、本章は「正名論」の二重性格を明らかにした。以下はこの 2 点である。

①思想面において、「正名論」が唱える王権秩序とは明治後期のいわゆる「一君万民」である天皇イデオロギー体制と異なり、「家臣→大名→将軍→天皇」という連鎖構造である。この構造は新井白石の「国王復号」論の反発であり、後期水戸学における尊王(天皇)思想の芽生えだと思われる。

②現実面において、18 世紀の日本における「内憂外患」の情勢を歴史的背景にして、「正名論」は「必ず名を正さんか」という「正名」思想にもとづいて、本格的な幕藩改革として松平定信に献策したものと考えられる。

第二章「幽谷から正志斎への伝承と進化」においては、少年期から実用の学問に志したことを糸口として、幽谷の経世致用を重んじる学風の系譜を整理し、門人である会沢正志斎の学問系譜を論じた。元来、水戸学を一まとまりの学問として論じられることが多いが、戦後に至って 200 年間ほど続いた水戸学を前・後期に分けるべきという見方がようやく定着した。ただし、後期水戸学においても先駆者と後継者の学問関心や政治主張は必ず

一致していない。本章は「正志齋は幽谷からいかなる学問を継承したのか」という問題に対して二つの側面において論じた。

学問の側面として本章は前・後期水戸学を貫く『大日本史』の修史事業に注目した。後期水戸学者として幽谷と正志齋の幽谷は徳川光圀の遺志を継ぐことに使命感を持っていた。そのため『大日本史』の編纂事業は光圀の遺志の具現化として認識できる。さらに幽谷は率直な個性により史書命名をはじめ、みずから恩師との対立を招致し、ついに藩内の党派闘争を起こした。正志齋は青年期から『大日本史』の編纂事業に携わった。史館闘争において幽谷派が勝利を収めたのちに、幽谷に次いで総裁の任に就いた。正志齋は幽谷の経世致用の学風を受け継ぎ、藩政改革を唱える封事において常に建言した。正志齋と幽谷と経歴はほぼ一致している。ただし、幽谷が唱える「正名」思想と正志齋の「正名」解釈は齟齬があり、また光圀の遺志を如何に理解するかに関しても各々独自の解釈がある。

現実・政治の側面として後期水戸学派の「華夷」思想と西洋への関心とは「互いに増進させる」関係がある。中国の儒教思想（特に「華夷」思想）は「国学」思想と接触して幅広い論争を引き起こした。この思想的背景において後期水戸学はロシアの蝦夷地進出など現実的な「外患」問題に際して、極端な「尊王攘夷」論を生み出したと思われる。

幽谷から正志齋へと、世界認識は広がったにもかかわらず、自尊的かつ排外的な「国体論」は系統化していくことが知られる。本章は後期水戸学においては学問や思想上の営みが徐々に積み重なり、変容していく実態を明らかにした。

第三章『折衷』の構造——多学問の受容』では会沢正志齋の名著『下学邇言』をはじめ、水戸学のいわゆる「神儒折衷」の構造を考察した。

水戸学の「神儒折衷」姿勢は百科事典に書かれているほど常識とされているが、実際に幽谷ないし正志齋は国学者である本居宣長を始め、宋の朱熹や、荻生徂徠を評することがあり、さらにロシア警戒をきっかけにして西洋学も蓄積した。本章は幽谷と正志齋が代表する後期水戸学は「神儒折衷」の学問だけでなく、国学・朱子学・古学・西洋学など多方面の融合によって形成された学問であることを明らかにした。

また、後期水戸学者は他の学問を幅広く受容したものの、どちらの学風にも偏らず、「内憂外患」の問題に対して経世致用の学問を求めている。その学問的追究において特殊な「天皇・幕府」体制に対する特殊な解釈が生じ、その解釈が「尊王攘夷」思想の原形であると思われる。

第四章「尊王攘夷思想の系譜と『春秋』学との関連性」では、後期水戸学における「尊王攘夷」という言葉の使い方を糸口として、尾藤正英（1977）による「尊王攘夷」思想の特質、すなわち「尊王」「攘夷」の二分論を検証し、その上で中国の「尊王攘夷」思想の系譜（主に『春秋』学）を整理し、日中の「尊王攘夷」思想の関連性を考察した。

尾藤正英が挙げた論点の1つ目は「尊王」と「攘夷」とは分けて考えるべきであり、後期水戸学の「尊王攘夷思想」とは「尊王」と「攘夷」の結合によって形成される「国家の統一性を求める」思想だという。2つ目は「尊王・攘夷」思想は朱子学との関係性が薄い

ことで、日本の特有の思想と見るべきだという。本章はこの二つの論点を検証するために朱子学だけではなく、中国の「尊皇攘夷」思想の原形と見なされている『春秋』学の系譜を整理し、『弘道館記』（「尊王攘夷」が始めて言葉として現われた書物）の「尊王攘夷」理念と比較して、日中の「尊王攘夷」思想の関連性を改めて考えた。

本章は以上の中国の「尊王・攘夷」系譜に基づいて、尾藤氏の「尊王攘夷」二分論を検証した結果、以下のことを明らかにした。

①「尊王」と「攘夷」の言葉として具体的な意味によって、「尊王」・「攘夷」と分けて考えることができるが、ただ融合した「尊王攘夷」思想は後期水戸学者の発明ではなく、『春秋』において夙に存在している。

②『弘道館記』において唱えられた学問的な「攘夷」は唐・宋以降の「道統論」が成立する経緯と非常に近く、両者には事実上、学問的「攘夷」において類似した状況が観られるため、この点をなおざりにすることはできないと考えられる。

水戸学は「尊王攘夷」の源流として幕末から戦前までさまざまな人に取り上げられた。戦後に至って、狂信的な熱情が冷えつつ、客観的な研究がようやく始まったが、日本のイデオロギーとして水戸学（特に幕末から明治初期にかける時期）が批判される場合が多く、丸山真男や尾藤正英などのような系統的に水戸学派の思想の系譜を整理する研究は少なかった。

本論文が注目した「学問上の水戸学」は歴史書編纂事業に伴って発祥したものであり、その成立は中国からの儒学と日本本土の国学両方から影響を受け、多様な論説を融合した学問である。

筆者が目指す水戸学研究は、水戸学派の是非という結果論よりも、水戸学自体の成立・構成・背景を実証的に究明し、それを東アジアにおける文化の交渉という視野で照射する研究である。言い換えれば「彼らは何を学び、何を信じ、それを信じた理由とは何か」という3つ疑問点についてその答えを探り出すことが筆者の問題関心である。今後は本論文の成果に沿って、他の後期水戸学者の性格を含めてより広い視野で日本におけるナショナリズムの形成を考えたい。